

## オペラピョートル・イリチ・チャイコフスキー(1840年 - 1893年)

### オペラ『エフゲニー・オネーギン』 作品 24

アレクサンドル・プーシキンの同名の詩に基づいたオペラです。この作品は、ロシアの田舎の貴族社会を背景に、恋愛と拒絶、後悔といったテーマを描いています。特に主人公のタチヤナがオネーギンに手紙を書く場面(「手紙の場」)は、チャイコフスキーのオペラの中でも特に有名です。彼はこの作品でロシア語のリリックを大切にし、登場人物たちの感情を緻密に描写しています。

チャイコフスキーのオペラ《エフゲニー・オネーギン》(Evgeny Onegin)作品 24は、アレクサンドル・プーシキンの同名の小説を基にしたロシア・オペラの代表的な作品です。このオペラは1877年から1878年にかけて作曲され、初演は1879年にモスクワで行われました。チャイコフスキーはこの作品で、人間の感情や内面の葛藤を深く描き出し、ロシア・オペラの中でも特に感情豊かな傑作として知られています。

#### 背景

オペラ《エフゲニー・オネーギン》の原作は、アレクサンドル・プーシキンによる詩的な小説です。物語はロシアの貴族社会を舞台に、若者たちの恋愛や友情、失望、後悔を描いています。チャイコフスキーはこの小説に深く感銘を受け、特にタチアナの純粋で感情的な手紙の場面に共感を抱き、オペラ化を決意しました。

チャイコフスキー自身、恋愛の感情や自己の内面的な葛藤に悩んだ経験があり、このオペラは彼自身の感情を投影した作品といえます。作曲の過程で、彼は感情表現を重視し、登場人物たちの心の動きを細やかに音楽で表現しました。

#### あらすじ

《エフゲニー・オネーギン》は、3幕からなるオペラです。物語はロシアの田舎を舞台に、若い貴族オネーギンと、彼に恋をする純朴な少女タチアナ、そして彼らを取り巻く人々の感情の葛藤と悲劇を描いています。

## 第1幕

物語はタチアナと彼女の妹オリガが住む田舎の家から始まります。オリガの婚約者レンスキーが友人のエフゲニー・オネーギンを連れてタチアナの家を訪れます。タチアナは都会的で洗練されたオネーギンに一目で恋に落ちます。彼女はその夜、感情を抑えきれず、オネーギンに手紙を書き、彼への思いを告白します。しかし、翌日オネーギンは彼女の愛を冷静に断り、彼女の純粋さには感謝するものの、彼自身は彼女の感情に応えられないと告げます。

## 第2幕

オリガの名前日(名前を祝う日)のパーティーが開かれます。オネーギンはタチアナに対して依然として冷淡であり、その場の退屈さに苛立ち、レンスキーの婚約者であるオリガに軽い調子で接近します。これを見たレンスキーは嫉妬し、怒りのあまりオネーギンに決闘を申し込みます。決闘の場面で、オネーギンはレンスキーを撃ち殺してしまい、悲劇が訪れます。

## 第3幕

数年後、オネーギンは旅から戻り、ペテルブルクの貴族の社交界に現れます。そこで、すっかり大人になり、高貴な姿となったタチアナに再会します。タチアナは裕福な将軍グレーミンと結婚しています。オネーギンは自分がタチアナを愛していることに気づき、彼女に愛を告白しますが、タチアナは苦悩しながらも、今はグレーミンとの結婚を守るため、オネーギンの愛を断ります。オネーギンは絶望し、オペラは彼の内面的な葛藤の中で幕を閉じます。

## 登場人物

- **エフゲニー・オネーギン**: 主人公。都会的で冷静な若い貴族。物語の中で感情的な成長を遂げるが、後悔と孤独に苛まれる。
- **タチアナ**: 純粋で感受性豊かな少女。オネーギンに恋をし、彼に告白するが、最終的には自分の運命を受け入れる。
- **レンスキー**: 詩人で、オリガの婚約者。オネーギンの友人でありながら、嫉妬心からオネーギンと決闘を行い、命を落とす。

- **オリガ**: タチアナの妹で、レンスキーの婚約者。軽快で明るい性格を持つ。
- **グレーミン**: 高貴な将軍で、タチアナの夫。彼女を深く愛し、敬愛している。

## 音楽的特徴

チャイコフスキーは《エフゲニー・オネーギン》で、登場人物たちの感情を非常に繊細に音楽で表現しました。特に、**タチアナの手紙の場面**や、オネーギンの最終幕での後悔のアリアなど、感情の深さを表現する独特の旋律とハーモニーが特徴です。

また、チャイコフスキーはロシアの民謡的な要素を取り入れ、オペラの中でロシアの田舎や貴族社会の風景を描き出しています。オーケストラの響きは、しばしば詩的で美しく、登場人物の心情を音楽で豊かに彩っています。

## 影響と評価

《エフゲニー・オネーギン》は、ロシア・オペラの中でも特に重要な作品とされています。物語のロマンティックな要素と人間の内面の葛藤を描く力強さが多くの聴衆に共感を呼び、今日でも世界中で頻繁に上演されています。

特にタチアナの手紙の場面や、オネーギンの後悔の場面はオペラの中でも名シーンとして知られ、多くの歌手がこれらのシーンを表現することに挑戦しています。チャイコフスキーの感情表現と音楽の美しさが融合したこのオペラは、彼の作曲家としての才能が遺憾なく発揮された作品です。

## オペラ『スペードの女王』 作品 68

再びプーシキンの作品に基づいたオペラで、ギャンブルに取りつかれた兵士の悲劇を描いています。チャイコフスキーはこのオペラで、心理的な緊張感とドラマ性を音楽に凝縮させました。特に、主人公ゲルマンが運命に翻弄される様子が緊迫感を持って描かれています。

チャイコフスキーのオペラ《スペードの女王》(Pikovaya Dama、The Queen of Spades) 作品 68 は、ロシアの作家アレクサンドル・プーシキンの短編小説を基にした全 3 幕のオペラです。1889 年から 1890 年にかけて作曲され、1890 年にサンクトペテルブルクのマリンスキー劇場で初演されました。この作品はチャイコフスキーのオペラ作品の中でも特にドラマティックで深い心理描写がなされていると評価されており、彼のオペラ作品の中でも最高傑作の一つとされています。

## 背景

原作となるプーシキンの短編小説は、運命、賭博、愛、狂気といったテーマを扱っています。物語の舞台は 18 世紀後半のサンクトペテルブルクで、チャイコフスキーはこの時代の豪華さと陰鬱さを音楽で巧みに表現しています。

チャイコフスキーはこのオペラに特別な情熱を注ぎ、わずか 44 日間で作曲を完成させました。台本は、彼の弟であるモデスト・チャイコフスキーによって書かれていますが、原作からいくつかの変更が加えられ、登場人物の心理的な側面が強調されています。

## あらすじ

《スペードの女王》の物語は、ギャンブルに取り憑かれた青年ゲルマンを中心に展開します。彼は 3 枚のカードの秘密を知ることで富を得ようとしませんが、最終的には狂気に陥り、悲劇的な結末を迎えます。

## 第 1 幕

物語は 18 世紀後半のサンクトペテルブルクで始まります。ゲルマンは貧しい士官で、友人たちがギャンブルを楽しむ中、彼は賭け事には手を出していません。しかし、彼は秘密の愛を抱いており、それは貴族の娘リザヴェータ(リザ)です。彼女は伯爵夫人の侍女であり、すでに別の男性(イエレーツキー公爵)と婚約しています。

ゲルマンは、伯爵夫人が知っているという「3 枚のカード」の秘密に興味を持ち始めます。このカードの秘密を知ることで、大きな財産を手に入れられるという噂があり、ゲルマンは次第にその秘密を手に入れたいという欲望に駆られます。

## 第2幕

ゲルマンはリザヴェータに自分の愛を告白し、彼女の心をつかむことに成功します。彼女はイエレーツキーとの婚約を破棄しようと考えますが、ゲルマンの心は次第に「3枚のカード」の秘密に囚われていきます。

ゲルマンはリザヴェータを通じて伯爵夫人の寝室に忍び込み、彼女に「3枚のカード」の秘密を教えてくれるよう迫ります。しかし、伯爵夫人は驚きのあまり命を落としてしまいます。死の直前、彼女はゲルマンに対して「スペードの3、7、エース」という言葉を口にします。

## 第3幕

ゲルマンは伯爵夫人の亡霊に苛まれます。彼は「3、7、エース」の秘密を信じ、勝負に出ることを決意しますが、リザヴェータとの関係は破局を迎えます。リザヴェータはゲルマンの冷酷さに絶望し、ついには自ら命を絶ってしまいます。

最後の場面では、ゲルマンは賭博場でイエレーツキーと対決します。彼はスペードの「3」と「7」を使って勝利を収めますが、最後に賭けたカードがエースではなく、スペードのクイーン(女王)であることに気づき、錯乱します。ゲルマンは絶望のあまり自ら命を絶ち、オペラは悲劇的な結末を迎えます。

## 登場人物

- **ゲルマン**: 主人公。貧しい士官で、ギャンブルに魅了され、最後には狂気に陥る。
- **リザヴェータ(リザ)**: 伯爵夫人の侍女で、ゲルマンに恋する純粋な女性。彼女は婚約者との間で揺れ動く。
- **伯爵夫人**: リザヴェータの雇い主で、かつて「3枚のカード」の秘密を知っていたとされる年老いた貴族女性。
- **イエレーツキー公爵**: リザヴェータの婚約者で、ゲルマンの対立者となる。
- **トムスキー**: ゲルマンの友人で、ギャンブルについての話を持ち出す人物。

## 音楽的特徴

チャイコフスキーは《スペードの女王》で、登場人物たちの心の動きを表現するために多様な音楽手法を駆使しています。特にゲルマンの狂気やリザヴェータの純粹さが際立つメロディが印象的です。また、伯爵夫人の幽霊が登場する場面では、幻想的で不気味な音楽が用いられ、オペラ全体に緊張感を与えています。

さらに、18世紀の宮廷音楽や、ロシアの民俗的な要素も取り入れられており、時代背景を音楽で巧みに表現しています。例えば、第2幕の宮廷舞踏会の場面では、チャイコフスキーのパレエ音楽の要素も感じられる華やかな舞曲が流れますが、その中に潜む暗い予兆が不気味さを漂わせます。

## 作品の評価

《スペードの女王》は、チャイコフスキーのオペラ作品の中でも特に高く評価されています。物語の深い心理的描写や、緊張感あふれる音楽、悲劇的な結末が多くの観客に感動を与えています。また、オペラの中で描かれる狂気や運命への挑戦は、チャイコフスキー自身の内面の葛藤とも重なり、作曲家の精神世界が色濃く反映されています。

このオペラは、ロシア国内外で頻繁に上演されており、ゲルマン役はテノール歌手にとって非常に重要な役どころとされています。ゲルマンのキャラクターの複雑さや、リザヴェータの悲劇的な運命は、オペラファンに深い印象を残すものです。

## まとめ

チャイコフスキーの《スペードの女王》は、ギャンブルに取り憑かれた青年の悲劇的な運命を描いたオペラです。プーシキンの原作をもとに、チャイコフスキーは登場人物たちの内面的な葛藤や運命の不確かさを音楽で表現し、ロシア・オペラの傑作としての地位を確立しました。この作品は、彼の作曲家としての感受性と技術の高さを示す重要な作品です。